

静岡文化芸術大学図書館・情報センターだより

新 知 人 故 温

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2008.12 Vol.13

平成20年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
TEL (053) 457-6124 FAX (053) 457-6125
http://www.suac.ac.jp/library/

Contents

■表紙

『モナ・リザ』 ————— ①
『聖アンナと聖母子』

■図書館散歩

鶴岡・阿部久書店からの — ②
道のりー雑誌と私

文化政策学部 文化政策学科 学科長
阿蘇 裕矢

さまようことば、 ————— ③
交響する風景

ポルヘス、カポーティ、安部公房

デザイン学部 メディア造形学科 教授
古田 祐司

■特集

静岡文化芸術大学 ————— ④
図書館・情報センター小史：
蔵書を中心に

情報室長
今田 雅子

■巻末

知っておきたい ————— ⑥
図書館用語
《SUAC 編》

本学教員の著作物



『モナ・リザ』『聖アンナと聖母子』 レオナルド・ダ・ヴィンチ画
ルーブル美術館蔵

森田義之編『三巨匠(NHK フィレンツェ・ルネサンス5)』日本放送出版協会, 1991 [702.37/N69]

中世では創造は専ら神のみに属したが、ルネサンスはこれを「天才」としての人間に認める。これまで聖者と預言者の特権とされたものが、哲学者、詩人、最後に芸術家にまで拡張される。その理念の実現の頂点に立つものがレオナルドである。知性と天才の狂気との岐路に立って、巨人的な自己抑制によってあくまで静かな古典的調和を保持しようとする。

また中世にあっては、一般的に芸術は専ら不可視的な形相、神の世界を、可視的な物に投射する仕方が問題であった。それに反し、ルネサンスは自然物の直接的な忠実な再現が考えられ、これが遠近法の確立となった。遠近法が先ず絵画に導入されたことは、近代の空間意識が画家に於いて先取されたことである。近代科学がルネサンスの芸術家の工房を源泉の一つとするといわれる所以である。

レオナルドにとって、絵画と科学は未分の世界にあり、「絵画は科学である」との信条を持ち続けていた。そしてまた、あらゆるもの、即ち自然的なものを通して超自然的なものまでが表現されなければならなかった。代表的な絵画作品「モナ・リザ」「聖アンナと聖母子」に於いて、その最も完成したものを見ることが出来る。神の母性の感性化である。

画家はもはや自然の模倣者でなく、自然の認識者であり、更に、自然を超えた神聖なもの創造者である。レオナルドは言う、「画家の心は、その創造力によって、神の心に似たものに變形されねばならぬ」と。

【参考文献】

- ・ケネス・クラーク著 丸山修吉、大河内賢治訳『レオナルド・ダ・ヴィンチ：芸術家としての発展の物語』第2版 法政大学出版局、1981 [723.37/76]
- ・下村寅太郎著『レオナルド研究』(下村寅太郎著作集5) みすず書房、1992 [121.6/Sh53]



文化政策学部 文化政策学科 学科長
阿蘇 裕矢
Aso Yuya

本文中に登場した資料

『中央公論』 中央公論新社 1966- (本学所蔵)
ヘルマン・ヘッセ著 『車輪の下』 (ヘルマン・ヘッセ全集: 第2巻) 948/H 53/2
ロンドン作; 尾上政次訳 『荒野の呼び声』 938/A 44/5 *多数あり
『自然読本』 河出書房新社
『伝統と現代』 伝統と現代社
『自然と文化』 観光資源保護財団 2000-2005 (本学所蔵)
『あるくみるきく』 日本観光文化研究所
『ジュリスト』 有斐閣 2000- (本学所蔵)
『現代のエスプリ』 至文堂 2000- (本学所蔵)
日本地誌研究所編 『日本地誌』 (第1巻~第21巻) 291.08/N 71/1-21
吉村融編著 『ラジオ大学講座「政策科学 - 活力ある行政への挑戦」』
日高敏隆, 白幡洋三郎編 『人はなぜ花を愛でるのか』 389.04/H 59
イーファー・トゥアン著; 小野有五, 阿部一訳 『トポフィア - 人間と環境』 081/C 441/ TO 2-2
宮本常一著 『イザベラ・バードの 「日本奥地紀行」を読む』 291.09/Mi 77

鶴岡・阿部久書店からの道のり - 雑誌と私

『中央公論』11月号に、直木賞作家の佐藤賢一が「鶴岡と阿部久書店」という短文を寄せている。山形県鶴岡市は、人口10万人程度(合併前)でありながら、芥川賞で丸谷才一が、直木賞は藤沢周平や、さらに佐藤賢一も受賞するという特異な町である。丸谷も藤沢も佐藤もみな、阿部久書店の2階に山と積まれてある古本を読んで小説の着想を得ていたとのこと。私もこの近傍で生まれ育ったものの、そんな地域の遺伝子をまったく受け継がないで育ったようだ。

実は、この阿部久書店は、私の祖母方の親戚筋で、祖母に連れられて庄内交通のボンネットバスに揺られて出かけると、必ず帰りに何かの本を持たせてくれた。こんな少年期を経ても一向に読書に没頭したなどという記憶がない。さらに、国語の高校教員だった母は、私が哲学や思想に係わる書物を読むことに大変神経をつかって、私からそういう書物を遠ざけていたようだ。その理由は、思索を巡らして…、今にして思えば笑止千万、太宰治のような人生を送っては困るといふ、東北人の生真面目な親心だったのかも知れない。

したがって、大学に行くまでの読書で記憶に残っているのは、ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』や、ジャック・ロンドンの『野生の呼び声』といったいわゆる推薦図書だけである。

大学に入り、阿部久書店からは遠く離れてしまったが、雑誌を買っては斜め読みする習性がついてしまった。当時は、雑誌が花盛りで、河出書房新社の『自然読本』、伝統と現代社の『伝統と現代』、日本ナショナルトラスト編集・財団法人観光資源保護財団発行の『自然と文化』、そして近畿日本ツーリストがスポンサーになっていた日本観光文化研究所(所長:宮本常一)が発行する『あるくみるきく』が、地域文化や人間と自然とのかかわりを掘り起こしたり、都市論や社会論、風景論、空間論などを展開していた。脈絡のない雑誌の斜め読みであったが、その後の職業生活や、現在、大学で教える立場になっても大変役に立っている。

さらに、有斐閣の『ジュリスト』もよく読んだ。1970年代のジュリストは、増刊総合特集と銘打って分厚い版が店頭に並んでいた。タイトルを紹介すると、現代の水問題、開発と保全、文化財の保存と再生、地方自治の可能性、土地・人間・生活、都市の魅力、国土計画と生活圏構想、これからの大都市、これからの都市再開発、都市計画と土地政策、集合住宅、日本のこども、都市の再生、現代人の生活拠点…などである。また、至文堂の『現代のエスプリ』も、社会における様々な課題を多面的な視野からアプローチしていた。

1970年代から80年代にかけてはこうした雑誌が目白押しで、新聞で知っては書店に買いに行った。雑誌は時代を凝縮している。当時の多方面の学問分野の当代一流の学者による書き下ろしの論文を読むことを手がかりに、図書館で改めて著書を探すのが、私の大学時代における読書スタイルであった。

その後、シンクタンク時代は、全国の農山村や都市を様々な視点から調べ上げて、地域を計画することになるが、最初に必ず読んだ本は、『日本地誌』(第1巻~21巻, 日本地誌研究所編, 二宮書店, 1967~1980)だ。この大学に来て、すぐに購入をお願いした。発刊は古いが、今なお、地域を読み解くためのこの上ない参考書である。

そういえば、「政策科学」という言葉に出会ったのもひとつの冊子である。今でも大切にしている。大学院時代の恩師がアメリカから送っていただいた葉書(1974年)に記された“政策科学”という言葉が記憶に残っていたが、その後、本屋の片隅で見つけた『ラジオ大学講座「政策科学 - 活力ある行政への挑戦」』(吉村融編著, 旺文社, 1981.8)は、“政策科学”への関心を深め、私の転機にもつながった。大学を離れて民間の設計事務所や公園などの設計や計画をしていた私は、形をつくる部分(デザイン)に疑問を持つようになっていたときであって、政策科学という言葉に反応してしまい、シンクタンクへと足を向けることになったのである。

さしずめ、私にとって雑誌は、連想検索 Webcat Plus のようなものだったのかも知れないが、今でも時折読んでみては、今を考える手掛かりになっている。

ところで、最近は、たとえば、『人はなぜ花を愛でるのか』(日高敏隆他編, 八坂書房)、『トポフィア - 人間と環境』(イーファー・トゥアン著, 小野有五・阿部一共訳, せりか書房)、『イザベラ・バードの「日本奥地紀行」を読む』(宮本常一著, 平凡社)といった書籍が面白い。

(注)阿部久書店は、現在の店主で5代目になるが、明治20年から貸本、古本、新刊本を扱い、綿問屋も営んでいた。古くは江戸時代から続くようである。



デザイン学部 メディア造形学科 教授
古田 祐司
Furuta Yuji

文中に登場した資料

ボルヘス [著]; 篠田一士訳 『伝奇集』 968/R 17/1
安部公房著 『箱男』 913.6/A 12
T. カポーティ [著]; 鍋島能弘, 西崎一郎訳 『草の豎琴』 938.9/G 34/10
トルーマン・カポーティ著; 河野一郎訳 『遠い声 遠い部屋』 933.97/C 16
カポーティ著; 龍口直太郎訳 『冷血』 933.97/C 16-2
Truman Capote [著] "Music for Chameleons" 933.97/C 16
バッハ (作曲) 『バッハ: ゴールドベルク変奏曲』 763.2/G 73
トルーマン・カポーティ [著]; 川本三郎訳 『叶えられた祈り』 933.97/C 16

さまようことば、交響する風景 ボルヘス、カポーティ、安部公房

蒙(くら)きを啓(ひら)き、世界と人生の謎を解き明かす——読書をそうしたことのためとする考えには随分と居心地の悪さを感じてきた。頁を繰り活字に目を走らせる。リニアに配置された文字のつらなりを、幾重にも堆積した記憶の地層の深みへと染み入らせる秘めやかなデータプロセッシング。そこに立ち現れてくるのは、何よりも謎としての世界の相貌それ自体ではなかったか。私にとって人生に役立ったり世界を多少なりとも解釈した気にさせる読書ほど屈なものはない。

たとえば J.L. ボルヘスの『伝奇集』。20 世紀前衛文学の中でも特異な位置を占める、アルゼンチン生まれの孤高の巨匠による短編集である。恐るべき博識と哲学的メタファーが詩的な文体によって封印された迷宮としての宇宙。ボルヘスを読むという体験は、幼い頃過ごした街をかすかな記憶を頼りにさまよい歩くのに似ている。言いようもなく懐かしいのにどこかが、何かが決定的に違うのだ。間違っているのは自分の記憶なのか、あるいはそもそもまったく別な場所を故郷と思い違えているのか？どちらにしても大事なことではない……もうこの街の外に出ることはないのだから、と正体を明かした迷宮が妖しく囁きかける。

あるいは安部公房、『箱男』。20 代の頃から何度、この奇妙で不可解な作品を読み返したことだろう。そのたびに自らダンボール箱を被って街へ彷徨い出る誘惑と戦いながら。書物に感染した日常がすべての配置そのままにフッと異界へとすり替わるめくるめく感覚……。<翌日、A は箱をかぶったままでテレビを見た。(中略)そして、翌朝一ちようど一週間目—A は箱をかぶったまま、そっと通りにのび出た。そしてそのまま、戻ってこなかった。A にもし何か落度があったとすれば、それはただ、他人よりちょっと箱男を意識しすぎたというくらいのことだろう。> そう、読書が時として代償を求められる行為でもあるということを誰も忘れてしまっている。身の安全などはじめから保障されてはいないし、大切な何かをその対価として失うことだってあるのだ。

映像制作という仕事柄か、読書に熱中しているとき視覚イメージが突然溢れ出てきて自分でも驚くことがある。トルーマン・カポーティの『草の豎琴』をはじめて読んだとき、彼が幼年時代を送ったルイジアナの、むせかえるような緑の薫る田園風景と胸の奥を揺さぶるエピソードの数々が、途切れることなく映像として脳裏をピリピリと流れ続けた。19 歳でニューヨーカー誌にデビューして以来、最初の長編作品『遠い声 遠い部屋』やノンフィクション・ノベルの傑作とされる『冷血』の成功で天才の名をほしいままにし、やがてドラッグとスキャンダルの泡立つ渦に呑み込まれていったカポーティ。彼は人生の成功と虚飾と墮落とを自らのイノセンスと混ぜ合わせて中和させようとはしなかった。生前に出版された最後の著作『Music for Chameleons』の中に輝くようなきらめきを放つ一篇がある。『A Beautiful Child』。1955 年早春のニューヨーク、友人の葬儀に参列したカポーティとマリリン・モンローが、午後と一緒に過ごした数時間のスケッチ。人生の共犯者のように人目を避けて寄り添うふたりの〈セレブリティ〉が、ゆきついたサウス・ストリート・ピアの棧橋で交わす会話。橋桁を打つ波と風の音、かもめの鳴き声。遠くにイーストリバーを渡るフェリーの汽笛。

MARILYN: Remember, I said if anybody ever asked you what I was like, what Marilyn Monroe was really like - well, how would you answer them?
(Her tone was teasing, mocking yet earnest, too: she wanted an honest reply)
I bet you'd tell them I was a slob, A banana split.
TC: Of course. But I'd also say ...
(The light was leaving. She seemed to fade with it, blend with the sky and clouds, recede beyond them.
I wanted to lift my voice louder than the seagulls' cries and call her back: Marilyn!
Marilyn, why did everything have to turn out the way it did? Why does life have to be so fucking rotten?)
TC: I'd say...
MARILYN: I can't hear you.
TC: I'd say you are a beautiful child.

背景のブルックリンの街並みと薄藍色に暮れ始めた空を映し出しながら、カメラはゆっくりとトラックバックしてゆく。静かにエンディングテーマが F・I —— グレン・グールドの弾くバッハ『ゴールドベルク変奏曲』。奇しくも同じ 1955 年のニューヨーク、CBS スタジオで録音された旧録盤の終わり近く、調性の宇宙を巡り終えてもういちど最初の主題に戻ってくるところだ。カッピングノイズのむこうに、かすかに呻くようなグールドのハミングが聞こえる……。そういえば、未完のまま終わった遺作『叶えられた祈り』の扉に引用されていたのは、聖テレジアのこんな言葉だった。く叶えられなかった祈りより、叶えられた祈りのうえにより多くの涙が流される>

静岡文化芸術大学図書館・情報センター小史：蔵書を中心に

情報室長 今田 雅子

開学以来8年が経過し、当館の蔵書は今年度中に20万冊を超える見込みとなりました。

大学図書館としてはまだまだ小規模ですが、10年経ずして20万冊というのは本学規模の大学としては驚異的な数字です。そこで、その種明かしをしながら、蔵書を中心とした本学図書館の生成過程を振り返ってみたいと思います。

図書館・情報センターは、大学施設の北西角の1・2階からなり、面積約2,800㎡、閲覧席231席、ユニバーサルデザインを具現し書架間は広く、間接照明が美しい。館内にはPC104台(メディアステーション70台、情報検索コーナー24台、ノート型10台)が設置され、2階閲覧席はすべてインターネット接続可能なハイブリッドな環境が整っています。

蔵書約20万冊(うち洋書2万5千冊)、所蔵雑誌約3千種(うち外国雑誌約400種)、新聞24種(うち外国語10種)。

開学した平成12(2000)年当時、カウンターからは書架と周囲の壁ばかりが目立ち、本は所々に配架されている程度でした。もちろん図書館の1階は未使用の状態です。新しい大学のために収集された文化政策やデザイン・美術の新刊本、加えて、本学の開学に尽力された故高坂正堯京都大学教授の寄贈資料(主に国際政治、外交、軍事関係)である『高坂文庫』約4千冊が並んでいました。

開学年度の末に、静岡県立大学短期大学部浜松校から約7万3千冊の図書が寄贈(ラベルにオレンジ色を施す)されました。この中には、磐田郡龍山村西川の和田家が三代(江戸時代中期から後期)にわたり収集した歌書、史書、漢籍、遠州国学関係の和装本千百余冊から成る『和田文庫』も含まれていました。

本学の前身といえる静岡県立大学短期大学部浜松校は、昭和41年に静岡女子短期大学の浜松教場として英文科と国文科の2学科から出発し、昭和45年に食物科、昭和50年に看護学科を増設し、公立短大図書館としては最大規模にまで達したものでした。しかしその後、看護学科は静岡市に設置された県立大学短期大学部(駿河区小鹿)に移り、蔵書は減じました。更に、本学が開学することになり、10万冊余の蔵書のうち食物関係は静岡県立大学(駿河区谷田)へ、食物以外の主だった理系の蔵書は前掲の県立大学短期大学部へ、そして文科系蔵書の大半は本学に収められました。

そのうち、短大の当初から存在した国文科関連の図書は、古典文学関係資料例えば『古事類苑』、『群書類従』、『日本古典全集』、『国史大系』、『史料大成』、『故実叢書』等々、現代文学の漱石や鷗外は勿論、『逍遙選集』など200を超える現代個人文学全集類も豊富です。また、ドイツ哲学の洋書の全集 Kant や Hegel 等々も充実しているものの一つです。帝国議会議院や貴族院『議事速記録』、『日本教科書大系』、『明治前期産業発達史資料』等も含みます。そして、文化や芸術を語るうえで避けることのできないというより、その根源に存在する宗教に関する書物のうちキリスト教に関する蔵書、聖書は勿論、『アウグスティヌス著作集』、トマス・アクィナス『神学大全』(継続受入中)やカルヴァン『キリスト教綱要』等々も短大から寄贈されたものです。

大学開学の際に、イギリスの美術批評家、社会思想家である John Ruskin の全集 39 冊(1903 年刊行)が寄贈され、本学の貴重書に指定されています。また、日本歴史資料の集大成『大日本史料』等も所蔵されました。

開学後の平成12~14年は、蔵書充実のための特別予算も付き、文化史学の Burckhardt 全集、仏教書、例えば『大正新脩大藏経』等の仏教の原典が充実しました。同時に、新刊本で入手不可能となった美術・デザイン関係の全集・作品集・研究書といった類の定評ある図書、『レオナルド・ダ・ヴィンチ素描集:ウィンザー城王室図書館所蔵』

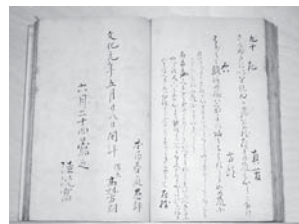
『和漢三才図会』全107巻81冊
正徳版か。

江戸時代中期に成立したわが国初の絵入り百科事典。大阪の医師寺島良安著。



『九十番歌合』写本 1冊 文化11年

『六拾番歌合』と合綴1冊。
本居春庭太人判。催主高林方朗。



The works of John Ruskin.
Library ed.39 vols.

London,G.Allen,1903

ジョン・ラスキンはイギリスの美術批評家、社会思想家。主な著書『建築の七燈』『ヴェニスの上』『この最後のものにも』『胡麻と百合』等。



等のファクシミリ版を、古書店のサイトやカタログを利用して購入してきました。理工系の資料はある意味新しさが生命といえますが、本学のような文化・芸術系は古い資料に価値のある場合が往々にしてあります。また、古典から新刊までを複層的に所蔵しなければ、蔵書の厚みも出ないでしょう。伝統ある良い図書館の蔵書は、古典は勿論、其の時々において購入すべき図書が、高い見識のもとに着実に集められ、揺るぎ無い蔵書構成をなしています。驚き、感動、深遠な文化を感じさせてくれるような図書館には、本学はまだ歴史も浅く道半ばです。特に雑誌のバックナンバー等(電子ジャーナルを含む)の収集も今後にも期す状態です。しかし、そうした良い図書館に成長することを目指して、蒐書を行って来ております。そして、地域にあっても文化や芸術関係の拠りどころとなるような図書館資料を持ち、それに見合うサービスを充実させていくことが大切であるといえます。

本学の場合、購入と同時に寄贈資料による充実も図ってきました。美術館・博物館の展覧会図録等の収集は今や約3千冊となり、特色あるコレクションを成しています。ベトナム関係の寄贈本、故斎藤教授からの外交史関係の寄贈本、そして、平成19年度には初代学長である故木村尚三郎先生のご遺族から西洋中世史を中心とした貴重な資料5千余冊が寄贈されました。

図書館は刻々に成長する生命体です。そして大学図書館は、温故知新、人類の英知の結晶が今生きて脈打つ、大学の心臓部なのです。

キリスト、釈迦に会える。ギリシアや日本の神々にも会える。歴史上の大哲人、大芸術家にも会える。歴史が織り成す幾多の文明の興亡、その他、森羅万象を目の当たりにすることができる驚異の空間。多くの先人の肉声(いのち)がこだまする、不思議な場所。

図書館は夢の空間です。必ず先人の生命に触れることができるでしょう。

『大正新脩大藏經』85巻 大蔵出版

『大正新脩大藏經図像』12巻 大蔵出版

仏教の原典の集大成。

全テキストがデータベース化されている。

<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>



項目\年度	平成 12	平成 13	平成 14	平成 15	平成 16	平成 17	平成 18	平成 19
蔵書冊数(冊)	116,937	126,038	139,995	151,574	160,912	171,076	179,896	193,234
資料費(単位:千円)	96,414	28,145	37,428	34,297	34,388	31,544	30,101	31,511
寄贈資料関係など	年度末に県立大学短期大学部より『和田文庫』を含む約7万3千冊の寄贈	美術館・博物館等の年報・紀要・図録等の収集を開始	・『吉澤文庫』ベトナム関係資料 ・展覧会図録等の大量収集	・社史の収集 ・歴史関係図書寄贈 ・建築関係図書寄贈		故齋藤教授・外交史関係図書寄贈	日本史資料関係の寄贈	故木村尚三郎前学長の西洋史を中心とした『木村文庫』約5千冊の寄贈

【文中に登場した図書】

- 『古事類苑』 [031/Ko 39]
- 『群書類従』 [081/Ko 53]
- 『日本古典全集』 [081/N 77]
- 『国史大系』 [210.08/Ko 53]
- 『増補史料大成』 [210.088/Z 5]
- 『故実叢書』 [210.09/Ko 39]
- 夏目漱石『漱石全集』 [918.68/N 58]
- 森鷗外『鷗外全集』 [918.68/Mo 45]
- 坪内逍遙『逍遙選集』 [918.68/Ts 21]
- Kant "Kant's Gesammelte Schriften" [134.21/Ka 59]
- Hegel "Sämtliche Werke" [134.4/H 51]
- 『帝国議会衆議院議事速記録』 [314.14/Te 24]
- 『帝国議会貴族院議事速記録』 [314.16/Te 24]
- 『日本教科書大系』 [370.9/N 77]
- 『明治前期産業発達史資料』 [602.088/Me 25]
- 『アウグスティヌス著作集』 [132.1/A 96]
- トマス・アクィナス『神学大全』 [132.2/Th 5]
- カルヴァン『キリスト教綱要』 [198.3/C 13]
- John Ruskin "The works of John Ruskin" [708/R 88]
- 『大日本史料』 [210.088/To 46]
- Jacob C. Burckhardt "Jacob Burckhardt Werke" [701/B 91]
- 『大正新脩大藏經』 [183/Ta 24]
- 『大正新脩大藏經図像』 [183/Ta 24]
- 『レオナルド・ダ・ヴィンチ素描集:ウィンザー城王室図書館所蔵』 [723.37/L 55]

知っておきたい図書館用語《SUAC 編》

用語	解説
ABC (Automatic Book Circulation: 自動貸出返却装置)	表示される画面の案内に従って、利用者自身が図書の貸出・返却手続を行う機器のこと。図書館2階に2台設置されている。処理エラーを防止するため、ABCを使用する際は1冊ずつ確実に処理し、完了を知らせる確認音が鳴るまで図書に触らないようにすること。レシートには個人情報や貸出期限が記載されているので、放置せず図書と共に持ち帰りましょう。
BDS (Book Detection System)	図書館の出入口に設置されているシステムで、適正に貸出手続を行っていない資料の館外への持ち出しを防止するための装置のこと。BDSは図書館資料以外に反応してしまうこともあるので、アラームが作動した場合は図書館職員の指示に従ってください。
集密書架 (移動書架、電動書架)	図書館1階に設置されている、資料の収容能力を優先させた移動式の書架のこと。ボタンを押して希望する書架を開ける仕組み。他の書架のボタンが点灯している場合は、まずそのボタンを消灯してからでないとボタンは作動しないので注意。電動書架には安全装置が搭載されているが、使用する場合は、他の書架に人がいないことを確かめてからボタンを押すこと。
オンラインデータベース (Online Database)	ネットワークを經由して、遠隔地から利用できるデータベースの総称。本学の場合、学内のPCからインターネットを通じデータベース上に蓄積された情報を検索・閲覧することができる。本学図書館のWebサイトで閲覧できるオンラインデータベースとして、Genii(本・雑誌・論文など様々な学術情報を入手できる国立情報学研究所のサイト)、聞蔵IIビジュアル(朝日新聞社のデータベース)、Magazine Plus(雑誌記事索引検索)、Japan Knowledge(辞書・事典類をはじめ多数の知識コンテンツ)、静岡新聞データベース(静岡新聞社のデータベース)、Web OYA-bunko(大宅壮一文庫雑誌記事索引検索)がある。
電子ジャーナル (Electric Journal)	紙媒体ではなく、インターネット等の電子的な手法により提供される雑誌・逐次刊行物の総称。本学図書館のWebサイトで閲覧できるものに、InfoTrac Custom(約250誌が購読可能)などがある。
研究室貸出	本学図書館のOPACで所蔵検索したときに、所在が「研究室」と表示される資料は、教員研究室に貸出中である資料を指す。この場合、すぐには貸出することができないので、購入希望図書の申請をするなど、他の入手方法を検討したほうがよい。
購入希望図書	皆さんの学習や調査研究に必要なかつ有用な書籍で、本学図書館に所蔵が無い場合、購入希望の申請を出すと、図書館で購入の可否を検討のうえ当該図書を所蔵する仕組み。申込みができるのは本学の学生のみで、雑誌・漫画類や高額な図書、本学図書館の所蔵に相応しくないと判断された場合など、購入できない場合もあるので注意。申請用紙は図書館カウンターにあります。ぜひ積極的に利用してください。
一夜貸出	参考図書および最新号の雑誌を除く逐次刊行物(雑誌、紀要、縮刷版の新聞)は、一定の条件の下、午後4時半～翌開館日の午前9時半まで貸出が可能である(金曜日に貸出した場合は、翌月曜日の午前9時半まで貸出可)。
情報リテラシー (Information Literacy)	「情報及び情報手段を主体的に選択して活用していくための個人の基礎的な資質」(臨時教育審議会第2次答申・1986年)のこと。具体的には、情報を使いこなすための能力のことをいう。本学では、今年度スタートした1年生対象の図書館利用に関する導入教育「資料探索法」などで、情報リテラシー教育を実施している。

本学教員の著作物

川勝平太(共著)学長	『「内発的発展」とは何か』 藤原書店, 2008.11	002/Ka 94
川勝平太(共著)学長	『笑える子ども。-未来に向けての教育改革論。(エンジン01選書)』 びあ, 2008.11	購入手続中
川勝平太(共著)学長	『新しい人間観を探る—KOSMOSフォーラム』 春秋社, 2008.5	114.04/A 94
川勝平太(共著)学長	『経済学名著と現代』 日本経済新聞社, 2007.12	331/N 71
川勝平太(共著)学長	『日経・経済教室セレクション2008』 日本経済新聞出版社, 2008.12(刊行予定)	購入手続中
上野征洋(共著)副学長/文化政策学科教授	『CC(コーポレート・コミュニケーション)戦略の理論と実践・環境・CSR・共生』 同友館, 2008.8	674/Ko 78
須田悦生(著)国際文化学科特任教授	『伝承の「場」を歩く-芸能・物語・歴史をめぐって』 三弥井書店, 2008.9	386.81/Su 13
西田かほる(共編)国際文化学科准教授	『近世の宗教と社会1 地域のひろがりと宗教』 吉川弘文館, 2008.5	210.5/Ki 46/1
伊坂正人(共編)生産造形学科教授	『消費社会のリ・デザイン』 大学教育出版, 2008.12(刊行予定)	購入手続中